

研究活動のための専門職 「リサーチアドミニストレーター」

研究と教育は教員の専権事項とされてきた日本の大学に、リサーチアドミニストレーターという新しい専門職が政策的に導入されようとしています。従来の大学には、個別研究プロジェクトの事務処理、会計処理や書類の取り次ぎなどを行う部署や事務職員が存在していました。ところが昨今は、大型プロジェクトの企画調整や積極的な研究機会の開拓、研究不正防止やアウトリーチ支援、はたまた全学的な研究戦略立案などが新たな業務として認識されるようになっていきます。十年ほど前から専門部署を設立する事例が名大ほか幾つかの大学にみられました。ここにきて専門職の必要性が広く認められてきたのです。

海外の事例

欧米の大学では、専任のリサーチアドミニストレーターが数十年前来活躍しています。研究担当副学長のもとに専門のオフィ스가設けられている例が多く、多岐にわたる業務をスタッフ間で分業しています。

企画立案を主業務とするスタッフであれば、プロジェクト提案者となる研究者に対する相談業務が大半を占めます。共同研究のマッチングや、申請ノウハウの提供も行います。ときには、新しい助成プログラムや申請書式の最適なあり方などを研究資金配分機関側に伝えることもあつてです。ほかに、会計処理、中間／事後評価対応、アウトリーチといった資金獲得後の支援

ることが評価されているのではないかと述べたりリサーチアドミニストレーターもいました。

研究コミュニティを拓く

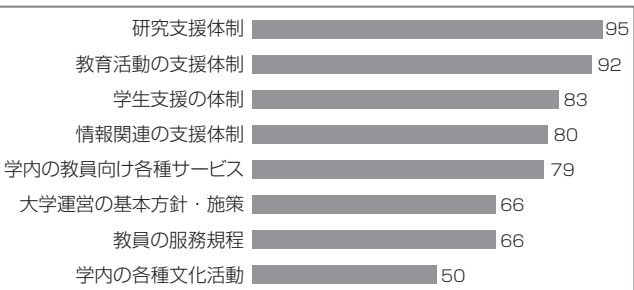
ただし、ピア（専門家仲間）や自律性を重んじてきたのが研究コミュニティです。リサーチアドミニストレーターの存在が大学内に浸透し、研究者と協同関係を結ぶまでには、海外でも相応の時間と労力がかけられてきました。

いっぽうで、大学における研究活動の当事者は、本来、教員や学生に限られるべきではありません。学内のさまざまな部署の職員、科学技術・学術行政に携わる人々やファンディング機関の人々、生み出された知見を社会的経済的活動に応用する人々や研究活動を通じて育成された人材を雇用する人々。納税者だつて当事者に含めることができます。研究活動がとも多くの当事者によつて成り立つものであることを、私たち大学教職員はつい見落としがちではないでしょうか。

研究活動に資する人材としてリサーチアドミニストレーターが認知されることは、この「研究活動の当事者」という概念を刷新する可能性を持つように思えます。リサーチアドミニストレーターが研究活動の本質や大

新任教員アンケート結果

「今後、名大教員として勤務する上で、必要な情報はどのようなものとお考えですか？」
(N=110, 平成23年度調査)



平成23年度新任教員研修のティーブレイク
(2011年4月5日、野依記念学術交流館にて)

学の使命についての理解を含む形で専門性を築けるかどうか、そういった人材を大学として雇用・育成できるかが、今後、大

学の研究が健全に社会にひらかれ、発展していくための鍵となりそうです。
(齋藤万子)

セミナー、講習等のご案内

「あいちサイエンスコミュニケーション・サマースクール2011」

2011年8月24日[水]～26日[金] @全学教育棟
○本場米国から講師を招いてのサイエンスイラスト講習会です

「研究発表資料をつくる —ポスター・スライドづくりの理論と実践—

2011年9月8日[木] @全学教育棟
[理論編] 10:00～12:00
[ポスター実践編] 13:00～15:30 (申込要、定員25名) ※

「学術広報の世界へようこそ — 広報誌制作教室」(仮題)

2011年9月30日[金] 13:00～16:30 @理学南館(予定)

- 10月以降のラインナップ
- ・研究公正入門 — 研究不正に巻き込まれないために ※
 - ・科学技術政策の動向 ※
 - ・クリティカルシンキングの技法 ※
 - ・他者の学習を支援する — コーチングのいろは ※

詳細は下記 URL より各セミナーページをご覧ください(※は院生・研究員が主対象です)。
<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/>

学生論文コンテストのご案内

本年度の応募要項を公開いたしました。締切は来年1月です。
お近くの本学学部生にぜひご紹介ください。
<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/ronbun/>

かわらばんへの皆さまのご意見・ご感想を裏面のEメール
アドレスまでお寄せください

Higher Education Glossary

高等教育にまつわる用語集

学生の研究体験 Undergraduate Research

近年、欧米の大学では学士課程教育における学生の研究体験を促進する方策がとられています。「学生の研究体験」と聞くと、多くの方は卒業研究を思い浮かべるのではないかと思います。学生の研究体験の中に卒業研究を位置づけることはできませんが、学生の研究体験はより広い概念です。米国において学生の研究体験を促進している学生研究体験協議会は、学生の研究体験を「学士課程学生によって実施され、専門分野に対して独自で知的もしくは創造的な貢献をする探究や調査」と定義しています。

学生の研究体験の形態は多様です。研究体験を初年次から段階的にカリキュラムに配置している大学もありますし、一部の優秀な学生を対象にカリキュラム外のサマープログラムとして提供している大学もあります。また、学士課程の学生が研究発表する場を設けたり、学士課程の学生を対象にした論文誌を発行したりする学会や大学もあります。

学生の研究体験は、1969年に開始されたマサチューセッツ工科大学のプログラムが起源だと言われています。同プログラムは、教員の支援のもとで学士課程学生を研究プロジェクトに参加させる活動でした。これまで米国の研究大学における学士課程教育に対しては厳しい指摘がなされてきました。そのひとつは、「多数の学生が、同じ大学に所属する世界的に著名な研究者と会うこともなく、そして本格的な研究活動を体験せずに卒業してしまっている」というものです。学士課程の学生にとって研究とはいかなるものかという根本的な問いかけを含む指摘と言えます。

日本の大学と同様に最終学年次における卒業研究が重視されてきた英国の大学においても、研究体験のあり方が見直されています。英国の場合、学生が研究活動に主体的に参加しているという意識が低いことや、最終成果である卒業論文が本人と指導教員にしか読まれない場合が多いことが問題視されています。

卒業研究よりも広い学生の研究体験という概念は、学士課程教育の再構築に対して新たな視点をもたらすものだと言えるでしょう。(中井俊樹)

名大新任教員研修の課題

名古屋大学では例年4月上旬に新任教員研修を行っています。この研修は前年度の4

教育研究センターが企画運営を担当しています。

月以降に着任した常勤教員（フルタイム勤務の研究員を含む）を対象とし、本年度の参加者は130人を数えました。研修の目標は、名古屋大学の教員としての各種職務の遂行に必要な基礎的知識を得ること、授業改善のための方法およびその情報源を知ることです。これまで前者は職員課（旧・人事労務課）が、後者は高等

研修参加者に対するアンケート調査も継続的に行っています。新任教員として今後必要な情報について尋ねたところ、研究・教育活動、学生支援、情報関連に関する支援体制について回答者が高い関心を寄せていることがわかりました。これに対して、学内の文化活動や服務規程、大学運営に対する関心は相対的に低くなっています。

参加者の自由記述からは主に二つの課題が明らかとなりました。一つは、各支援組織

が別々に紹介資料や各種パンフレットを配布しているため、新任教員が知っておくべき情報を効率的に整理しづらいことです。このため、来年度からは配付資料を冊子体にまとめて提供し、研修後も効果的に利用できるようにすることを検討中です。

もう一つは、口頭説明の内容がともすると事務的な「べからず」集に偏りがちで、研修全体が新任教員の意欲をか

きたてる雰囲気にならずしなっていないことです。まずは「名

古屋大学へようこそ」という歓迎の姿勢を打ち出し、大学として新任教員を組織的に支援する用意があることを伝えるべきでしょう。同時に、新任教員が所属部局を超えて相互交流する機会を提供し、彼らの緊張や不安を解きほぐし、活気あるアカデミック・コミュニティの醸成を図ることが肝要であると考えます。(近田政博)

※本紙表面の図、写真も併せてご覧ください。

読んでおきたい この1冊

Great Books on University

『悪魔はすぐそこに』

D.M.ディヴァイン 著 山田 蘭 訳
創元推理文庫 2007年 (原著 1966年)

本書は、英国の大学を舞台にした本格ミステリです。ミステリの舞台として大学が選ばれること自体は珍しくありません。しかし、それらと一線を画す点として特筆すべきは、ディヴァインが大学事務職員のキャリアを持つ兼業作家であり、その知見が本書のプロットや描写に大きく寄与していることです。

匿名の投書による横領告発、老講師の変死、夜の大学図書館で起きた殺人、名誉学長暗殺予告一学内で次々に起きる事件は、教職員それぞれが抱える複雑な人間関係やキャリアをめぐる葛藤とともに語り進められていきます。また、学位を持つ年若い管理職員カレンの下で働くことに不満を持つ古株職員ミス・ピム、上司の劣

等感ゆえに疎まれる大卒の警部補フィニーといった人物造形も目をひきます。本書原著の刊行が、英国における大学進学率が極めて低いことを問題として取り上げた『ロビンズ報告書』の勧告（1963年）、クロスランドの演説（1965年）を経て、ポリテクニク創設など高等教育人口拡大のための政策が動き始めていた時期であったことと関わっているのでしょう。

ミステリとして高い評価を受ける本書ですが、60年代英国における大学事情や伝統的大学の雰囲気伝える作品としても興味深いものとなっています。(東望歩)

高等教育研究センタースタッフ (2011年7月現在)

センター長	木俣元一	専門領域：西洋中世美術史
教授	夏目達也	専門領域：高等教育学、技術・職業教育論
准教授	近田政博	専門領域：比較高等教育学、学習支援
准教授	中井俊樹	専門領域：大学教育論、高等教育マネジメント
助教	齋藤芳子	専門領域：科学技術社会論

研究員	東 望歩
	豊田 哲
客員	トリシア・カヴァデール=ジョーンズ (英国・ボーツマス大学)
	金子元久 (国立大学財務・経営センター)
	加藤かおり (新潟大学)
	山内乾史 (神戸大学)

名古屋大学高等教育研究センター

〒464-8601 名古屋市中種区不老町
Tel 052-789-5696
Fax 052-789-5695

E-mail info@cshe.nagoya-u.ac.jp
URL http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/